

新刊
紹介

L・W・ハブル著

『英詩の展開』

(東京・南雲堂、英文、A5判
一二四頁、一〇〇〇円)

著者名のハブルは、いまやペン・ネームでしかない。実名は林秋石。一九五四年、Lindley Williams Hubbell 氏は、世阿弥元清に、能にひかれて、アメリカから、わが国に來たり、京都におちつき、同志社大学の教授に就任された。その後しばらくして、国籍も日本に移され、名も林秋石とあらためられた。定年で、同志社を去られることになった一九七〇年まで、英文学科の陣容は、教授を持つことによって、一段と

For some in ancient books delight,
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

充実したものとなったことは、知る人ぞ知る、である。本書はこのことを記念して、林秋石博士記念事業会の名において編集され、それにふさわしく、そのはじめと終りを、上野直藏名誉教授、それに林先生の友人や教えをうけた者一同の言葉によってかこんでいる。

すでにアメリカにあるときから、いくつかのすぐれた詩集を発表されていた先生は、本学へ來られてから以後も、*Lectures on Shakespeare* (一九五八)、『*Shakespeare and Classic Drama* (一九六二)』それに

「花伝書」の英訳 (一九六八) などのすぐれた業績を発表されたが、その間に書かれた珠玉の単論文を集めたものが本書である。『*The Academic Week*』と題する、担当のクラスのことをうたった詩を、いわばプロローグとし、『*The English Lyric in the Sixteenth Century*』『*The English Lyric in the Seventeenth Century*』『*Some Characteristics of Modern Poetry*』『*Yeats, Pound and No Drama*』『*A Note on the Shakespeare Apocrypha*』の論文が続く。論文の題名か

らみてもわかるように、本書は、英詩の展開を通史的に扱ったものではない。むしろ、詩人、学者である著者の好みととらえた英詩の諸相が、見事にうきばりにされている。そういう意味ではやはり、これは林秋石風の「英詩の展開」でもあらうか。そのすぐれた内容もさることながら、ここに用いられた、洒脱た、洗練された、平易な語り方も味わうべきものとして特筆しておきたい。

私は、しかし、本書の表題には、英語の *Miscellany* の方を好む。ただし、これが「雑文のよせ集め」といつているのではない。これは立派な「論文集」なのであり、更にいえば、この *Miscellany* と題された書物が、英詩の展開の上に実に重要な役割りを果たしていることを思うのである。『*Tottel's Miscellany*』、『*Tonson's Miscellany*』などが英詩史の中でいかに重要な位置をしめるかは、著者も本書の中で指摘している。

Miscellany という一見やりげない表現がつけられた背後には、こんなことも含蓄されているのではなからうか。これはひとつしたら、私の邪推でもあらう。しか

し、それだとしたら、私はそれを希望にかえるであろう。英詩史のなかで上述の *Miscellany* があたえたと似た触発作用を、この本は読者にあたえることが期待できるからである。(木村俊夫・大学文学部教授)

田畑 忍著

『日本の平和思想』

(ミネルヴァ書房、B 6 判
二四三頁、一二〇〇円)

本書は護憲と永世中立宣言の運動に挺身しておられる田畑忍博士の古稀最初の出版である。私は日頃、博士の身近かに接し、博士のあの気魄に満ちた、持続する情熱がいったい何に源泉するのか知りたいたと思ってきた。本書を読了したいま、博士の魂魄の一端にふれ得たという想いを禁じえない。序論の「平和思想の系譜」、(一)「平和思想の発展」、(二)「日本の場合」において世界的視野のもとに考察がすすめられ、そのなかに日本の平和思想の位置づけがなされている。この二つの緻密な論証をふまえて、日本国憲法第九条の絶対平和主義、永

世中立という法意が一点の疑いの余地なき明晰さで説かれているのはみごとくいうほかない。

博士の蘊蓄うんしやくを語る人は多い。それは至当である。だが、はたしてそれだけであろうか。

本論の「明治の平和思想家たち」では、横井小楠、北村透谷、内村鑑三、幸徳秋水、田中正造等々一七名が、「大正、昭和の平和思想家たち」では、吉野作造、尾崎行雄、大杉栄、斎藤隆夫、矢内原忠雄、南原繁等々一九名の平和思想家が、彼等の生きよの根柢を見据える博士のゆるがぬ視線と愛情によっていきいきと描かれている。

いかに冷静、客観的に描こうとも、その行間に論者の息づかいが滲み出るものである。平和思想家を論ずるその態度の一貫性が胸を打つ。それは博士御自身が真正の平和主義者、人権主義者の故である。どのひとりをもおろそかに論じていないことが、このことを示して余りある。

私は世代論というものをさほど信じない。が、もし、道義を重んじ筋を通すということに人間の生きるまっとうな原姿をお

く者を明治人であるとすれば、博士はまごうかたなく明治人的である。この不動の信念の奥底から三十六名の平和思想家に對面し、ときに自問自答しつつ論じられたが故に筆致が鮮明なのである。本書一巻の特長を列記して筆を措はなこう。巻頭の豊富な肖像写真、関連写真、揮毫写真は何ものかを語りかけてくる。貴重な資料である。目次の題名が実にユニークである。本書を読了して、いま一度目次をみるとよい。本文の叙述が浮かんでくる。たとえば、「護憲・抵抗・非戦の田中正造」、「議會制民主主義に徹した斎藤隆夫」、「戦時、反戦・抵抗に終始した記者、桐生悠々」の如くである。豊富な引用、文献、参考資料、巻末の人名索引は便利である。

おそらく類のない本書一巻を三読沈思すること、私たちは日本の平和思想の遺産、その制度的根柢を知らされる。と共に、私らが負わねばならぬ歴史の重みを熟考させられるであろう。読者への配慮をもった一巻である。

(根本博愛・四国学院大学専任講師、同志社女子大学嘱託講師)

同志社社史史料編集所編

『史料彙報』第五集

(同志社、B5判五十二頁、一五〇〇円)

新刊の社史史料編集所「史料彙報」第五集は、現存の京都府文書、それに基づいた稿本「京都府史」と京都府文書中の教育記録の筆写本(仮に「徳重資料」という)との三種の資料から、同志社初期の史料を収録している。

「彙報」第二集には京都府知事から外務郷に報告した「同志社視察之記」(明治十二年五月〜同十六年六月)が外務省記録から収録され、第三集には明治八年十一月「同志社仮規則」が某大学所蔵本から登載されるなど、社外の同志社史料蒐集のレコードは進む。

第五集採録資料の一つである京都府文書は、京都府庁から府総合資料館に引継がれた現存の記録であるが、この公文書からは、最近青山墓地に墓の所在が明らかになったD・C・グリーンンの条約書をはじめ、初期

の米国人教師関係書類若干が収められている。

史料的价值からいうと、編纂ものであるけれども、「京都府史」には、私塾開業願、私学開業存寄書、明治九年六月の同志社規則のような、同志社英学校開学当初の経緯を明白にした価値の高い史料がある。この「京都府史」は、内閣文庫「府県史料」中の「京都府史料」の複本にあたるものであり、決して、珍らしい文献でもないが、何故か今までの同志社々史には利用されていない。

「徳重資料」は、元来昭和十五年に上巻だけが刊行された「京都府教育史」編纂のために筆写されたもので、編纂執筆の一人である故徳重浅吉大谷大学教授の手に保管されていたものである。所収の明治十年のいくつかの家塾願は、同志社女学校が同志社分校女紅場の名称で開学願を出したのが、府勸業課からの反対があつて女学校と名称を変更した事情を物語っている。そのほか女学校外国人傭人一件の記録など史料の乏しい女学校史の欠を補うものが少なくない。

殊に興味をひくのは、京都府監察掛の同

志社雇入米国人宣教師の動静の探索書である。この報告書は京都府から外務省へ上申したのであるが、例えば「京都府史」明治十年八月の探索書の出所である「外国人雇入一件」記録は、今はその所在が不明である。ところが「徳重資料」には、原本が失なわれた探索書が筆録されていてテラ、ルール子ト、デビス、ドーンらの動静がわかる。女学校ではハムレー(パミリー)、ウィルソン両人の所業、給料の出所についての疑いなどを記した探索書がある。また同志社地所入手に関する探索書もある。「彙報」所収の「徳重資料」には係員の印章が省略されているが、筆者の手控によると探索書には監察掛六等属高木文平の印が押されていることが認められる。女紅場の名称を女学校と改称することを学務課へ詮議を申し出た勸業課の文書の付箋にも「高木文」の印がある。

以上収録の資料は、残存する史料の至つて乏しい開学当時のものであり、この意味において史料編集所の社外資料の蒐集の労苦を多としたい。